



SIEMENS 6S ELa 2427

◀第2次世界大戦が始まる寸前のドイツ時代に生産された業務用のモノラルアンプ。出力管に6BQ5を2本使用した7Wクラスのアンプで、メインボリューム、3系統のライン入力ボリュームのみのシンプルな仕様になっている。この時代にはこのタイプのアンプが数種類あり、コンパクトなサイズなので容易に屋外などへも過般して街頭などでも使用されていたのかもしれない。市場価格は24～30万円

SIEMENS SF V6, 6

▶SF V6, 7とはほぼ同じ年代に生産された比較的小さな映画館での使用を目的として生産されたモノラルアンプ。コンパクトなボディに出力管EL95を2本使用した5W～7Wクラスのアンプになる。高域のみの減衰ボリューム、メインボリューム、3系統のライン入力ボリュームが付いている。こちらもV6,7同様に上に映写機をジョイントできるようにしている。それほどレンジは広くないが、業務用らしい中低域音のしっかりした音がする。市場価格は30～35万円/ペア



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

SIEMENS SF V6, 7

西ドイツで50～60年代に生産された映画館用のモノラルアンプ。この当時のドイツの音響用業務機は薄いグリーンにハンマートーンに塗装されたタイプが多く、一見すると不格好なデザインはこの上に映写機がジョイントできるようにしているため。出力管に6BQ5を2本使用した8W～10Wクラスのアンプで、高/低域のトーンコントロール、メインボリューム、3系統のライン入力用ボリュームが付いた仕様になっている。このタイプの中では比較的大きなサイズのアンプとなり、レンジも広く力もある。市場価格は40～45万円/ペア



第9回 ドイツの小型アンプ

TELEFUNKEN / SIEMENS

ドイツは戦前から劇場や放送局で使われる高性能なアンプを多数開発していた。出力管EL34を2本または4本使った大型の劇場やホールで使われる大出力のアンプやEL156を使ったカッティングマンドライブ用のアンプもあったが、6BQ5やEL42等をシングルやプッシュプル動作させた比較的コンパクトなサイズのアンプも種類が多く3W～10Wくらいのパワーしかないが、当時生産されていた比較的小型で高効率のスピーカーを鳴らすには十分な性能を誇っていた。

本文 / 田中伊佐資

キャプション / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ドイツの小型アンプ



TELEFUNKEN V73

◀1960年代にスタジオの小型スピーカー用のモニターアンプとして開発されたモノラルパワーアンプで、かのビートルズがスタジオ録音に好んで使用していた事で有名。出力管はEL42を2本使用した5～7Wのモノラルアンプで、スタジオのラックにビルトインできるように非常にコンパクトにまとめられた設計は、ドイツの技術力の高さが伺われる。それほど力のあるアンプではないが、密度の高い中音域の再現性に優れていてボーカル等はスッと2個のスピーカーの間に浮き上がってくる感じ。市場価格は35～40万円/ペア



TELEFUNKEN S81

▶ステレオの時代になってから生産された出力管6BQ5をシングル動作の3～4Wのステレオアンプ。家庭用の小型スピーカーを鳴らすには十分な実力も持っていて、ちょうどノートパソコンぐらいの大きさのボディにパワー部分もコンパクトに納められた優れモノ。また、センターチャンネル用のライン信号出力端子があり、それまでモノラルで使われていたスピーカーをセンタースピーカーとして小型のステレオ用のスピーカー2個と連動させて3Dでスケールの大きなサウンドを楽しめる設計にもなっている。市場価格は18～20万円



激しく物欲がわいてくるデザイン
キュートな小型アンプを聴き比べ！

「今回のテーマはこれですわね」とアトリエJe-teeの岡田さんは、不思議な機械を指さした。手前に4つの押しボタンがついている。カセット録音機かと思ったが、風たいがあまりにも年代物すぎる。「これアンプなんですよ」と言われ、そのかわいらしさに激しく物欲がわいた。いまのメーカーはなぜこういうデザインを参考にしないのだ。なんだったらバクっていいい。
今回のテーマはドイツの小型アンプ。ドイツのユニット・シリーズが2回続いた流れを引き継ぐ恰好となる。
アンプは3台あった。キュートなボディでいきなり魅了してくれたのが、そのテレフンケンS81。そして縦長で素っ気ないルックスはテレフンケンV73。「これはビートルズがスタジオ録音で使ったことで知られています」
そう聞いてビビッときた。となるとこのアンプでビートルズのオリジナル盤を聴くのは最高にいい気分かも。3台目が映画館で使われたシーメンスSFV6.6。映写機をはめるため天板が溝などでごちゃごちゃしている。でもこれなら鳴きにくいから、音にはいいはずだ。顔立ちもまたいい。
スピーカーはロレンツのオーデットで、かなりの稀少モデルらしく2台並ぶことが奇跡的なんだぞうだ。
まずはノラ・ジョーンズの「ドント・ノー・ホワイ」をS81で聴いてみた。温

かくやわらかい音。リヴィンクルームで安らかに流したい。もっと高価で物量を投じたアンプは山ほどあるけど、持っているだけで裕福な気分になるだろう。V73は打って変わってソリッドでウォールカがちょっと前に出る。ちよつとクールなところが、なるほどスタジオ・ユースと合点がいった。低音はもう少し量感があってもいいと思ったが、モニターで音質をチェックすることが用途なので、菌切れない方がちょうどよいのかもしれない。
最後のシーメンスでまたまたがらりと変わる。今度は豪勢でダイナミック。薄い板材で組んだエンクロージャーが楽器的に鳴っている。スケールが大きい。ペーシスの懐も深い。いかにもシアター用だ。音のことだけを考えたら、僕にはこれが一番好ましい。ドイツの映画館で活躍していたアンプで、こつこつと音楽を聴く、しかも場所は50年後の日本。不思議な気持ちになる。
管弦楽版の「展覧会の絵」やマンハッタン・ジャズ・クインテットの「枯葉」など何曲もかけながら3つのアンプを比べていく。時間が経つにつれ、おやつとなった。V73がどんどん化けてきた。ソリッドな音に厚み加わり屈強になった。最初とずいぶん違う。真空管が完全に温まって、じわじわと本領を發揮してきたのだ。ボーカー・フェイスの大逆転だった。

Lorenz Audette

▶今回の試聴で使ったとても珍しい1950年代に生産されていた家庭用の2wayシステムで、ユニットはLorenzのフルレンジのLP-215 (21.5cm)と2μのコンデンサーでローカットされたトワイターLPH-65 (5cm)が搭載されている。キャビネットサイズは60×60×29とコンパクトだが、非常に薄い板で構成されているため、クランクギターがボディに弦の音が共鳴して豊かな音階を奏できるようにユニットの音と箱が一体となったサウンドはとも21.5cmのユニットが鳴っているとは思えないスケール感がある。市場価格は50～55万円/ペア

